



子供のころ、スウェーデンの児童文学『ニルスの不思議な旅』を読んだ人は、地上を見下ろし、世界を俯瞰する感覚を経験したのではないだろうか。最近盛んに流されるドローンで撮影した映像を見ていると、その本を読んだときに味わった感覚を思い出す。筆者の場合、甦るのは、悪戯っ子ニルスがアヒルに乗り、ガンの群れと共にする旅を通じて成長する物語の教訓性よりも、視点によって景色の上下関係とスケールが変わるいわばあべこべ感覚である。ニルスが鳥たちと共有する眺めの素晴らしさ。冬季に米国から越冬のためにメキシコに移動するオオカバマダラの大群は世界をどのようにに見ているのか。彼らには壁も国境も領土もない。メキシコで越冬蝶の群れが晴れた日に風に乗って川のように流れるのを眺めながらそんなことを考えた。高峰を目指す登山隊が頂上を極めたときに得られるのも、上空に近づいたということ以上に、そこから下界を俯瞰したときの、それまで見たことのない世界の風景を見ているという実感ではないだろうか。

筆者が登った高山と言えば、国内では燧岳や白馬岳、利尻富士、国外ではカナリア諸島にある富士山とはほぼ同じ標高のティデ山ぐらいしかないが、頂上に着いたときに味わったのはやはりあのあべこべ感覚だった。その感覚はメキシコのテオティワカンにある「太陽の神殿」と呼ばれるピラミッドの頂上から下を見下ろしたときにも得られた。

ひとりの人間の経験は限られている。たとえば筆者は五年間本学に勤め、毎週東京と名古屋の間を新幹線で往復し、アルゼンチン作家のコルタサルなら《橋》と呼びそうな二都間の水平移動を繰り返してきたが、いまだに本学のキャンパスを上空から見下ろしたことがないし、多分これからはないだろう。セルゲイ・ボンダルチュク監督の旧ソ連映画『戦争と平和』にある負傷したアンドレイの意識が薄れ、猛烈な勢いで上昇し戦場を見下ろす場面、落差がもたらす効果は実に印象的だったが、あのような感覚は日常では得られない。とはいえ、視点を変え、異なる視点から世界

を見ること。偉大なアーティストたちはそれを実践し作品としてきた。

そのようなアーティストのひとりが彫刻家のイサム・ノグチだ。彼には《ブレイマウンテン（遊び山）》という作品がある。初めはニューヨークのセントラルパークに作るはずだったのが、市の公園委員に拒絶されたために、模型の段階に留まったが、その模型自体が地球の一部を思わせるのだ。それは上空あるいは他の惑星から見たとき形状がわかるといふ宇宙的視点をも感じさせる。実際、ノグチは一九四七年に「火星から見える彫刻」というプランを発表していて、その模型もある。しかし彼は生前そのプランを実行できず、《ブレイマウンテン》を作ることでもできなかった。彼の設計に基づく《ブレイマウンテン》が札幌市郊外のモエレ沼公園にいに誕生したのはその死の十七年後のことである。まずモエレ沼公園の敷地だが、かつてゴミの投棄場だった広大な土地をノグチは敢えて選んだ。常識的には考えにくい選択である。ドローンを使わなくても彼には見えていたのだろう。そこが大地の一部であり、宇宙的な目で見られるべき土地であることが、《ブレイマウンテン》には古代文明が作ったピラミッドやいくつもの遺跡のイメージが付与されていることがわかる。イサムがかつて訪ね歩いた人類の遺産である。

あるとき大学の図書館周辺の階段が、急に《ブレイマウンテン》の階段に見えた。もちろん既視感が生んだ幻影に過ぎないのだが、この筆者の経験は、日常的に存在するものも、別の見方をすれば新たなものになることの証のように思える。視点を変える。そのとき景色は魔法をかけたように変わるのだ。イサムは、あなたをいまのあなたのようないしアーティストにしたのはなにかと問われ、「まず第一にはくらが自分といっしょに持ち歩くのは子ども時代、かつて一日一日に世界を発見するという魔法が宿っていたときの思い出」と答えている。その思い出を我々は持っているだろうか。